

特別寄稿：古典をひも解き城を探る

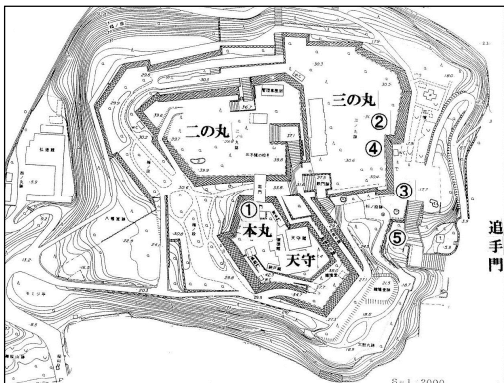
高知城「御築城記」とその後の穴太衆

日本城郭協会顧問 中城 正堯

安土城に始まる近世城郭は、高石垣と天守をその特色とする。江戸時代の大名居城は175城に及ぶが、高知城のように天守・本丸御殿から各曲輪の高石垣まで残存する例は少ない。さらに、当初の築城記録が「御築城記」として残されているのも貴重である。本稿では「御築城記」を中心とする山内家の史料によりながら、関ヶ原合戦直後の高知城築城の生々しい様子と石垣師・穴太の役割、さらに築城後の穴太衆の行動を追跡したい。なお、「御築城記」では安納を用いているが、ここでは穴太と統一表記する。

一豊の築城家スカウト

「御築城記」など高知城の築城関連の原史料は、明治末期から山内家家史編輯所が編纂し、昭和55年に刊行された『山内家史料』の第一代『一豊公紀』に納められている。この公紀では、「御築城記」の前に慶長5年(1600)の「御家伝記」を記載、土佐拝領直後の同年11月に一豊が長宗我部の居城だった浦戸城を離れての新築城を徳川家康に申し出て、「勝手次第」との上意を得たとある。一豊は翌年正月に土佐に入国、浦戸城に入る。四月一日からは百百越前・野中主計(益継)などを連れて国内巡視を開始するが、治安把握と城地選定が中心だったと思われる。



高知城跡平面図(高知県教育委員会提供・一部名称加筆)
※図内の番号は、撮影した建造物の所在地



① 高知城本丸西北面の高石垣(筆者撮影)

城地選定から築城の次第は、「御築城記」に詳しく述べてある。大高坂山^{おおだかさか}を城地を選び、慶長6年9月に鉄初めの式を行い、着工している。築城惣奉行は百百越前・出雲父子、御普請奉行(土木工事)は木部茂兵衛・山田久兵衛で、その下に穴太・北川豊後^{くわはし}とある。さらに御作事奉行(建築工事)竹島伝次や、鍛冶奉行がいる。

ここで注目すべきは、一豊の見事な人材スカウトぶりである。近江生まれの百百越前は豊臣秀吉に仕えて戦功をあげ、越前守という受領名まで朝廷からもらっていた。関ヶ原では西軍に属し、一豊にとっては敵方であったが、その能力を買って六千石の高給で招いている。同様に北川豊後は近江坂本の穴太衆であり、「穴太手筋なかんづく巧者」とされ、一豊は最初百石を提示したが、他藩に奪われては大変と考えて百五十石に増石、招聘している。関ヶ原直後には、徳川体制のもと築城ブームとなり、有能な築城技術者は奪い合いだったのだ。なお、北川も豊後の受領名を持っているが、この時代は大名が与えたようだ。

厳重な警護のもとで人夫を動員

城普請には縄張り・整地とともに、石材の確保

が重要だった。「御築城記」には、「浦戸城石を苦しからざる所は取って江の口(城の北部河岸)へ大船で運び、そのほか久万・万々・神田・潮江・円行寺より取り寄せ」とある。さらに、「若衆は簀を荷ない、あるいは二人でかつぎ、幼少の者はたもとに石砂を入れて持参、町・郷の十歳以下の者へは砂一升・石一升につき鳥目(銭)を渡した」など、領民の動員ぶりも示している。

また、「御要害の縄(張)」「石普請堅固に仰せ付けられ」「石組み築き立て万端法の通り」とある。「法の通り」とは、穴太積の法則にかなった堅固な積み方を意味し、石材の材質や形状を見極めての石積み、隅角の算木積、壁面の勾配などが重要であった。大きな石は修羅や地車で運ぶとともに、石垣の受け持ち区分ごとに幟を立てて進捗状況を吟味し、高張提灯のもとで夜間普請も行っている。人夫は一日千二、三百人で、一人に搗き米七合と味噌代を払った。一豊は浦戸城から一日おきに巡検に来たが、同じ装束の五人がたえず同行し、いずれが殿様か分からないようにしたともある。浦戸湾を船で渡っての巡検で、警護を厳重にして長宗我部の地侍による反乱に備えながらの築城であった。大高坂山周辺での異変に備え、潮江・横浜から浦戸へと合図の火(のろし)も用意した。

慶長 8 年に本丸・二の丸の工事が完了し、8 月 21 日に一豊が入城する。**写真①**は西北から眺めた本丸だが、穴太積による急峻な野面・乱積の見事な高石垣である。二の丸とは廊下橋でつながっていた。領民に四重天守の威容を見せつけた一豊は二年後に病没、弟の忠義が二代国主となる。築城工事はその後も続き、慶長 16 年には三の丸が完成する。**図版**は、高知城平面図である。この間、江戸城や丹波篠山城の手伝普請に土佐藩も参加、百百越前は慶長 14 年篠山城普請の途上で病没するが、同家は幕末まで奉行職を勤める。穴太役には、慶長 16 年から角田六左衛門が加わり、二人体制となる。なお、『篠山城記』には、「江州穴田(太)という所より筑後・三河・駿河という石垣師来たりて石垣

を築く」とある。『細川家記』にも、慶長 19 年の熊本城「無双の石垣」は穴太の手筋の者であり、江戸初期の穴太衆の各地での活躍ぶりがうかがえる。

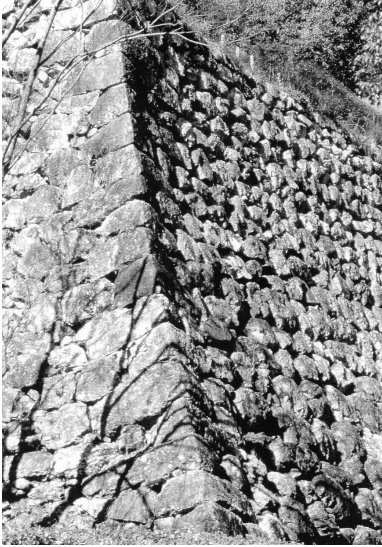
発掘された旧石垣・水路遺構

高知城では平成 16 年度から三の丸の石垣解体調査が行われたが、21 年度に石垣の積み直し完了し、報告書『史跡 高知城跡』が刊行された。今回の調査・修復で特筆すべきは長宗我部元親時代の旧石垣の発掘と保存である。現存する東側石垣の裏側 8 箇の地点から、**写真②**のように高さ 2.7 尺、長さ 13 尺の石垣が発掘された。報告書には、「自然石を使った野面積みであり、上端二石は山内入城後に改修している。隅角石は算木状であるが完成した算木積ではない」とある。元親がここに城を築いたのは天正 16 年で、織田信長の安土城築城から十年ほど後だが、当時の地方の石垣技法を示す貴重な遺構である。

百百越前は石材調達に苦勞したにもかかわらず、この部分の石垣は再利用せず、埋め込まれている。慶長 6 年からの本丸・二の丸工事の際、三の丸はいずれ拡張工事をするため、石垣の上端の改修のみにとどめていたようだ。三の丸改築工事は慶長 16 年に行われ、^{なかたかさか}中高坂の山を崩して土を運び、東へ大巾に拡張した。石垣の裏込石には、旧三の丸の石材も一部使われている。新三の丸の隅角は算木積みで、**写真③**のように高さ約 13 尺に達する高石垣になっている。



②発掘された長宗我部時代の石垣(『史跡高知城跡』より)



③三の丸南東面の高石垣
(修築前・筆者撮影)

こうして完成した高知城は、高石垣に囲まれ、中央に四重の高欄付天守がそびえ立っていた。元禄 11 年 (1698) に江戸から客人として招かれた齋藤唱水は、日記にこう記している。「こ

の御城は山城にて遙か遙か見上げらる。威儀堂々と勢い高し。門を入り石段をはるばると登る。この道けわし。本丸は左の方に殿主(天守)高くさし昇り、高欄あり。二の丸に常の御所をかまう」。この日記には、続けて二の丸、三の丸の御殿から御城下の御屋形まで、その広壮豪華な様子がよく記録されている。

ここで高知城完成後の、穴太衆の動きを追ってみよう。すでに触れたように、篠山城など天下普請への参加があり、更に城下町の整備や高知城の修復も業務であった。

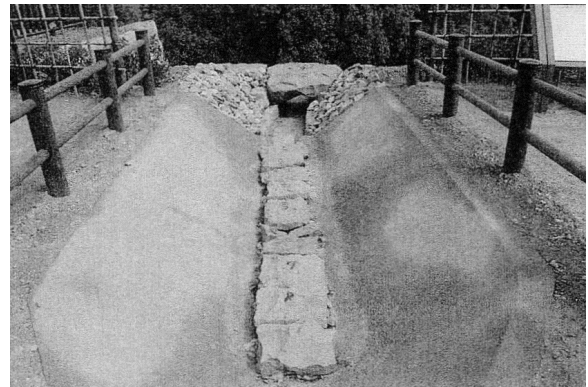
石垣の崩落修理は度重なるが、当時の記録から事例をあげてみよう。『山内家史料』には宝永 2 年 (1705) 4 月に三の丸石垣崩れるとある。「板垣自家雑記」はその様子を「鳴音雷の如く」だったとする。宝永 4 年 10 月の地震では、二の丸・三の丸の石垣「石数々抜け落ち、石垣割れ、孕んだ」とある。さらに、大風雨(台風)で天守の鯨しやちほこが落ち、石垣が崩れる被害も度々あった。石垣が孕み崩壊するのは、裏込石の不足など排水機能の欠陥だ。修復にはその都度幕府の許可が必要だった。穴太衆は、築城後も修理に追われたようだ。

今回の発掘調査では、三の丸から 5 本もの水路遺構が出土し、写真④のように一部復原展示されている。水路の底面は土をたたき固めた

三和土たたまきで、水路は割れ石や切石を使った石造であり、長いものは 15 尺いしゆいも伸び、先端は石垣から突き出した石樋となっている。土佐の台風や豪雨によって多量の雨水が御殿の大屋根から流れ落ちたが、この水流による石垣崩壊を防ぐ仕組みとして、何時の時代か修復に当って新設したようだ。石垣から突出した排水用の石樋は、今に城内の随所で見ることができる。写真⑤はその一つである。なお、排水口を石垣から突き出してあるのは、落下する水が石垣にかからない工夫である。穴太衆たちは、土佐の気候条件に備えた対応策を開発していったのだ。

築港にも活躍した穴太衆

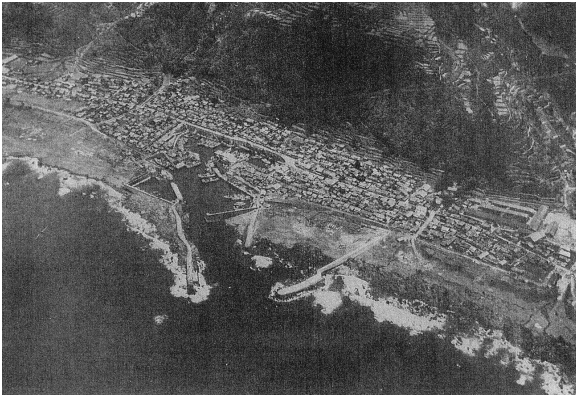
一豊が呼んだ穴太方・北川豊後の子である北川新兵衛は、万治 3 年 (1660) に悲劇的な最期を遂げている。「御家中変儀」には、新兵衛が「穴



写真上
④保存された水路遺構
(『史跡高知城跡』より)
写真右
⑤排水用の石樋
(筆者撮影)



太伝授の事これ有り、江州(滋賀県)大津坂本にまかり越し候ところ、師匠の小舅・市郎兵衛と申す者と喧嘩、彼の者を切り申し候えどもあい果たさず、新兵衛は切腹致すなり」とある。北垣聡一郎は『石垣普請』(法政大学出版局)で、「諸藩での〈穴太役〉の跡目相続には藩からその許可状が下付されていた。これと別に、本家(江州の穴太頭家)からの認可状的な免許も必



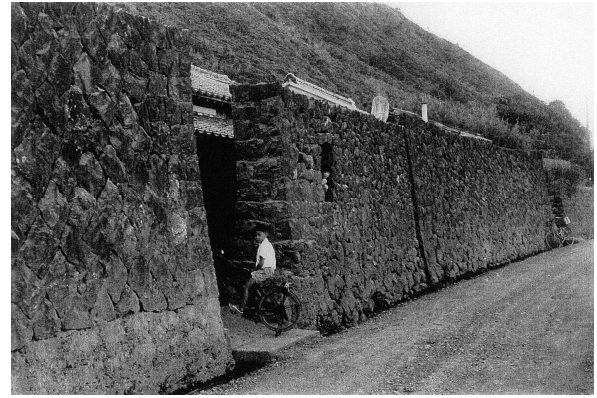
⑥室戸市津呂の掘削港(『室戸岬町史』1953年刊より)

要な時期があり、礼金が要求されたであろう」と述べ、この事件は穴太頭家の地位の後退を物語るとする。江州坂本の穴太頭は、やがて消滅する。

土佐の穴太衆の城郭以外での活躍も、『海南史学』に発表された荻慎一郎の論文「近世日本の〈堀湊〉と土佐」から紹介しておきたい。堀湊とは「掘り込み港湾」のことであり、土佐では二代藩主忠義の時代(1605~56)に奉行職となった野中兼山によって、高知市から東へは手結(香南市)、室津・津呂・佐喜浜(以上室戸市)の4港が築造された。これらは、藩主の参勤交代の渡海ルートであり、同時に海運・漁業の港湾としても重要であった。

手結は慶安3年(1650)着工で、日本最古の堀湊とされる。掘削した堀湊は壁面を石垣で築き、四方に犬走りを敷設して通路とした。困難を極めた工事の担当者は、「手結浦日抄浦中一卷記事」に御奉行・野中主計(兼山)、穴太方・角田義右衛門・北川新兵衛と記されており、近世初期の築城の技術が、堀湊に継承されている。津呂も本格的な湊普請は兼山によってはじまり寛文元年(1661)に完成、今に打込接・布積の石垣が残っている。続いて室津に着工するが、完成は没後の延宝7年(1679)だ。津呂と室津は、堀湊によって捕鯨基地ともなり、特に天和3年(1683)紀州(和歌山)太地から網取りの捕鯨法が移転されて栄えた。

写真⑥は、1953年頃の津呂港で、室津港とともに遠洋漁業の基地となっていた。改修・拡張されているが、なお堀湊時代の面影をうかがう



⑦室戸市高岡の石垣(1965年頃。筆者撮影)

ことができる。写真⑦は、室戸岬町(現室戸市)高岡の民家を波浪と強風から防ぐ巨大な石垣である。ここにも、穴太から続く石垣の技術が生きているようだ。野中兼山は、高知平野の物部川や仁淀川では新田開発を進めたが、仁淀川流域の波介川上ノ村堰(土佐市)の護岸などに、穴太積が使われている。これらの意欲的な大工事は、過重な賦役や多大の財政支出を招き、三代藩主・忠豊への交代とともに兼山は失脚する。

穴太方の北川家は二代新兵衛の変儀によって、いったん跡目断絶となるが、後に一族から新規取り立てとなる。土佐藩には歴代役人を記載した「御役人帖」があり、「穴太方」の項は、慶長6年の北川豊後に始まり、角田家・北川家それに宮崎家などが役目を継いでいる。終身雇用ならぬ「末代雇用」であった。しかし寛政12年(1800)に「穴太方差止め」、「御普請奉行へ附属」となる。穴太方は消えたが、その技術を使った土木事業は城郭にとどまらず、漁村や農村でも今に生きている。今後これらの貴重な文化遺産・土木遺産を修理・保存するためにも、穴太に始まる石積み技術の継承は重要であろう。

<主要参考文献>

山内家史料刊行委員会『山内家史料第一代 一豊公紀』山内神社宝物資料館 昭和55年
高知県教育委員会『史跡 高知城跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2010年
北垣聡一郎『石垣普請』法政大学出版局 1987年
武市佐市郎『武市佐市郎集 第八巻・第十巻』高知市民図書館 平成8年
辻重忠・小関豊吉『野中兼山』富山房 明治44年
荻慎一郎『南海史学』第52号「近世日本の「堀湊」と土佐」高知南海史学会 2014年

